

地域の民俗文化の継承における地域に根ざした観光教育の可能性

中島 智 (羽衣国際大学)

Keyword : 地域づくり、民俗文化、観光教育

はじめに

わが国の地方小都市では、多様な伝統文化や生活文化が継承されてきたが、少子高齢化や人口減少という時代の文脈の中で、消滅の危機に瀕しているものも少なくない。他方で、観光が国や地域の重要な施策として推進され、地方創生戦略としても期待が高まっている。こうした中で、地域の民俗文化は、単に文化的、歴史的な価値を保存するだけでなく、地域の経済や社会の再構築に向けた重要な資源として活用することが課題となっている。

今日の地域文化政策は地域づくりの一環として捉えられ、文化観光にも重きが置かれている。地域づくりと観光政策は理論的にも現実的にも融合し、地域の文化資源を活用した観光地域づくりやスペシャル・インタレスト・ツーリズム (SIT : 特別な関心に基づく観光) も広がりを見せている。この動向に対応する地域づくりに向けた試みの一つが「地域に根ざした教育」、すなわち地域のあらゆる資源、暮らしの全体を学びの対象とし、そこから社会的課題を解決し、平和な社会を実現しようとする活動を踏まえた観光教育の概念であると考えられる。こうした前提の下、本報告は、和歌山県湯浅町島之内地区における民俗文化の継承活動を分析することを通じて、地域に根ざした観光教育の意義と可能性について議論する。

研究の方法

研究は大きく以下の二つの部分からなる。

(1) 日本の観光教育の現状と背景について地域文化活動との関連に着目して検討し、「地域に根ざした観光教育」の概念設定を行う。

(2) ケーススタディとして和歌山県の「大学のふるさと」制度の中で、2017年度より筆者が関わっている湯浅町の「七夕まつり」および「シロウオまつり」を検討する。

1. 日本の観光教育と地域に根ざした教育

近年では、学校の内外において多様な形態で観光教育が実施されているものの、その言葉の定義が合意されているかどうかは疑わしい。日本でも観光立国政策の展開につれて、注目を集めるようになった経緯がある。例えば、地域づくりの手段としての観光を担う人材育成を意

識した地域と大学の連携による観光地域づくり教育が活発に行われている。また観光庁も観光地域づくり人材の育成を推進してきた。すなわち、最近では地域社会においても様々な形で観光教育が導入されている。ただし、そこでは、観光経営マネジメントの育成が強調され、経営学的な視点に偏重しているきらいがある。しかし、地域観光は、地域で伝承されてきた文化や生きた人間社会を前提とする営みである。この点、筆者は、特に従来の科学的・客観的な数値データに基づく判断だけでなく、トゥアンのトポフィリアのような感性的な要素が包含されなければならないと考えている。つまり、観光教育において人々と場所とのつながりを前提とした「地域に根ざした教育」の概念が重要となるのである。地域に根ざした教育 (Place-Based Education) という概念は、「ある場所に注目し、そこにある暮らし、社会、経済、事業、自然環境、動植物、文化、芸術、伝統、光景などすべてを、全体として学びの場とするもの。この学びの場を通じて、個人と集団に、幸福・福祉の向上、アイデンティティの確立、格差・抑圧からの解放といった成果が期待される。同時に、公正で持続可能な社会づくりにも貢献する」(高野他 2014:p. 10) ことが意図されている。

日本では明治時代後期から関連する実践の系譜が存在しているが、英語の文献では1990年代に入ってから議論が出てきたという。グローバリゼーションの進展に伴う没場所化や地域社会の衰退、地球環境問題の深刻化に対して、持続可能な社会づくりの必要性が認識されるようになってきたのである。

これまでにも、地元学の手法を基調とした観光文化の創造が議論されているが、(井口・中島 2011:p24-42)、今回は、「地域に根ざした教育」に関する議論に着想を得て、「地域に根ざした観光教育」という概念を提起したい。次章では、地域に根ざした観光教育の意義を整理する。

2. 地域に根ざした観光教育の意義

2.1 スペシャル・インタレスト・ツーリズム

地域の衰退、旅行行動の多様化の中で、観光教育においてもスペシャル・インタレスト・ツーリズム (SIT) に対応した学びが必要になっている。こうした状況下、地

域に根ざした観光教育それ自体を SIT とみなすことで、観光教育の倫理的な意味を見いだすことが可能である。

1990年代以降の観光研究の大きな課題は、マスツーリズムがもたらす負の効果を克服し、環境調和型の観光開発をいかに実現するかにあるといつてよい。すなわち、持続可能な観光の理念とその具体的な展開が議論されてきた。エコツーリズムやグリーンツーリズム、ヘリテージツーリズム等の観光形態や、観光まちづくり、観光地域づくりなどの地域自治ならびに地域経営システムを基盤にした着地型観光の実践が注目を集めてきた。しかし、それらは往々にしてホストである地域社会における観光開発のあり方に焦点を当てたもので、プロダクトアウトの発想として位置づけられる。持続可能な観光の実現には地域の主体性は重要な要素ではあるが、同時に観光者の旅行行動のあり方についても目を向ける必要がある。そこで、マスツーリズムに代わる各種の観光形態・観光実践を旅行形態に注目してまとめると、SIT と表現できる。

SIT は、特別な関心を実践する、あるいは楽しむことを基本的な動機とする旅行で、「通常とは違う趣味、活動、テーマ、目的地が含まれ、ニッチなマーケットに訴求する傾向がある」とされる(小槻2014:p.188)。それは、「逃避や気晴らしというより、能動的な自己啓発や新たな体験を得ることに関わるもの」である(小槻2014:p.191)。ここでは、ホストとゲストは一方の関係性ではなく、相互交流を行うことが求められる。そのためには、供給(ホスト)側にも需要(ゲスト)側にも人間ネットワークを形成し、経験や学習を深め、観光を創造し、享受する力量を身に付けることが要件になる(金武2017:pp.134-135)。よって、そうしたネットワーク形成のプロセスを支援することが、地域に根ざした観光教育には不可欠である。

2.2 内発的発展論

地域に根ざした観光教育の展開は、地域住民をはじめ地域社会に関わる人々に潜在する可能性を引き出していくプロセスであり、地域の内発的発展とみなすことができる。内発的発展とは、地域固有の風土や伝統を尊重し、地域住民が主体となって創出される発展のあり方である。

内発的発展において「伝統の再創造」に着目することが重要であることを指摘したのは、鶴見(1996,1999)である。鶴見は、「ある地域または集団において、世代から世代へわたって継承されてきた型(構造)」を「伝統」ととらえた上で、それを四つの側面に類型化している。すなわち、①意識構造の型、②社会関係の型、③技術の

型、④感情・感覚・情動の型、である(鶴見1996:p.29, 鶴見1999:p.33)。よって、民俗文化の活用は、伝統の再創造の四側面に類別して把握することが必要である。

また、鶴見の内発的発展論を援用し、鶴見が度々言及していた「共育」(地域での学び合いや教え合い)の視点から「地域力」(共同体の創造力)が読み解かれている(岩佐2015)。

鶴見以外にも多くの研究者が内発的発展に関する議論を進めてきたが、こうした議論を踏まえて観光研究の分野でも、「内発的観光開発」、すなわち、「地域社会の人々や集団が固有の自然環境や文化遺産を持続的に活用することによって、地域主導による自律的な観光のあり方を創出する営み」の重要性が認識されるようになっている(石森2001:p.10)。

石森は、『内発的』という言葉は閉鎖的な意味合いを喚起するが、一つの地域社会が潜在的に有している各種の可能性が発現される契機はほとんどの場合に外部の諸要素との出会いにもとづいている」と説明し(石森2001:p.11)、「地域社会の側がみずからの意思や判断で外部の諸要素を取り込んだり、それらとの連携を図ることによってよりよい成果を生み出す試みとみなすべきである」と主張している(石森2001:p.11)。これは、地域の内発的発展においては、地域外部の主体との交流や連携がきわめて重要な要件となることを示唆している。

そうした交流や連携は、共育の機会となる可能性を秘めており、そうした観光に内在する教育力を具現化することが地域に根ざした観光教育に求められている。

2.3 フィールドワーク教育

近年、観光教育においては域学連携によるPBLが活発に行われており、フィールドワークも教育手法として普及してきた。今日の学生にとってフィールドワーク教育は地域社会体験を通じて、学びの動機付けとなることが期待されているが、地域に根ざした観光教育は、フィールドワーク教育を牽引する役割を担うことが期待できる。

ところで、観光教育ならびに観光地域づくりの政策化が推進されてきた。しかし、いわゆるトップダウンで戦略的・効率的に導入された観光教育は、個々の現場での実践を積み重ねながらボトムアップで創出されるべき観光の営みと構造的に矛盾を抱えてしまうのではないかと。この点に関連して荒川(2012)は、地域政策における政策策定過程の科学化・透明化が逆に、住民に対して抑圧的に機能してしまう恐れもあることを指摘している。

よって、フィールドワーク教育では、地域と産官学の

相互依存的な関係を前提として、そのダイナミズムを把握することがまずもって必要である。その上で、地域社会の暮らしの現場から立ち上がってきた学びを通して、国や行政、企業等による定式化された仕組みや科学的な知見だけに頼らずに、地域固有の価値観や将来への展望を提示することが求められる。

観光ビジネスや観光地域づくりを担う人材育成が進みつつあるが、地域文化活動に代表されるような、暮らしや地域社会におけるインフォーマルな教育に注目した試みは乏しい。今後、地域に根ざした観光教育でのフィールドワークは、地域の固有価値の再評価・再創造を意識して進めていくことが重要となる。

3. 共育の視点からみた地域に根ざした観光教育の検討

本章では、筆者が所属する大学の域学連携の一環として学生たちと進めている和歌山県湯浅町でのフィールドワークの結果から、共育の視点からみた地域に根ざした観光教育の意義について探りたい。

3.1 和歌山県湯浅町島之内地区の概要

和歌山県の中部に位置する湯浅町は、紀伊半島の西部に深く入り込んだ湯浅湾の奥に面している。町域の広がりには東西 6.5 km、南北 3.5 km で、面積は 20.79 km² である。人口は約 1 万 2 千人で、全国的な傾向と同じく減少傾向にある。歴史的には、古来より熊野参詣の宿駅であり、熊野古道が市街地を通る唯一の町である。『紀伊国名所図会』(1851 年) に「海陸輻湊の地」とあるように、港町と宿場町を合わせた履歴を持つ地域である。

本研究のフィールドである島之内地区は、醤油の醸造町として知られている湯浅の小字の一つで、JR 湯浅駅から西方向に位置する広川河口に島之内商店街が立地する。

3.2 セタまつりの調査

「セタまつり」の淵源は、水神を祀る弁財天神社を勧請したことに求められ、当地の来歴を考える上で重要な伝統的な祭りである。弁財天神社の由緒書と、『湯浅町誌』(1967 年) によると、もともと島之内は平地の中央に河原が形成され、農耕に適さなかった。そこで、1601 年、湯浅深専寺第 8 世の住職・有伝上人が、広川の流路改修工事に取り組み、湯浅寄りに流路を変更し、広川河口北岸に石堤を築き、別所の弁財天社を勧請したという。

江戸時代後期、当地出身の菊池海荘は江戸で砂糖・薬問屋を営む傍ら詩作を趣味とし、湯浅に古碧吟社という結社を創設したが、その拠点となった古碧楼(旅館広久の別名で、後に旅館広屋)があったのも島之内である。

文化的なサロンとしての機能を果たした旅館が存在していたことが分かる。

昭和 2 (1927) 年、国鉄紀勢西線が開通し、紀伊湯浅駅が開業した(なお、現在の駅舎も開業時のもので、近代化遺産としての保存が望まれる)。国鉄開通を契機に、水田が埋め立てられ、新市街として島之内の開発が進んだ。

さて、セタまつりは毎年 7 月 7 日に実施され、2019 年は日曜日であったが、平日の年も、実施日は固定されている。場所は弁財天神社周辺および広橋を中心とした島之内商店街通り。当日は車両通行止めになり、界限には吹き流しが飾られ、広橋の 100m ほどの直線道と神社の参道に露店が並ぶ。浴衣を着た親子連れや若者でごった返し、日中からは想像できない賑わいを見せていた。

午後 5 時になると、神社前に町長をはじめ町の関係者が参集し、神事が 30 分ほど執り行われた。そして多くの親子が集まり、短冊がついた笹を奉納していった。他に、短冊に願い事を書くコーナーなど実行委員会の企画で来訪者をもてなす工夫もみられ、学生たちも思い思いの願い事を書いた短冊を笹につるしていた。主催はセタまつり実行委員会、地域住民、湯浅町商工会、湯浅町観光協会等、各種の地域団体が連携して実施されている。

2019 年度初めての試みとして、織姫と彦星に扮した衣装を着た小学生男女を先頭に子どもたちが笹飾りを持ち、弁財天神社に向かう行列が実施され、祭りを盛り上げる事となった。神社の細い参道を粛々と進む素朴な行列であったが、華やかな色彩の笹飾りをもった子どもたちの行列は見ごたえがあった。

坂口計夫さん(湯浅町まちおこし連絡協議会理事・シロウオまつり実行委員会会長)によると、この祭りは明治時代から始まり、昭和 20 年代から同じ広川河口で花火大会も併せて行われていた。当初は、島之内地区の住民が町内で寄付を集めて運営していたが、昭和 47 年頃から湯浅町観光協会が実施するようになり、町ぐるみのイベントとして定着していったという。なお、現在は時期が 8 月に、場所も湯浅広港に変更。(2019 年 7 月 7 日に筆者聞き書き)。

共育の視点から、今後は子どもたちの地域教育の機会として社会参加意識を育てることが肝要であり、祭りを通して、地域の歴史や文化への認識が深められるようにインタープリテーションを導入することもできよう。

3.3 シロウオまつりの調査

島之内地区では広川で四手網を使った伝統漁法であるシロウオ漁が現在も続けられている。これを周知しよう

と、例年3月に行われる「シロウオまつり」は、2004年から始まったイベントである。島之内商店街通りで踊り食いやシロウオすくいが無料でふるまわれ、炊き込みご飯が販売される。また広川で漁の見学もできる。なお、イベント自体は1日であるが、2月中旬から3月中旬までを「シロウオ月間」とし、飲食店でのシロウオ料理の提供等キャンペーンを推進している。このイベントは地域文化の表象を創出する上で大きな役割を果たしている。

島之内のシロウオ漁の起源は明確ではないが、『熊野獨參記』(1689年頃、著者不詳)に「此川(筆者注:広川のこと)下ニテハ冬ノ比シロウオヲ取ル」とあり、江戸時代に遡る。シロウオ漁は川中に組まれた櫓の上から川底に網を沈め、引き揚げてシロウオを柄杓で掬い取る漁法である。2月中旬から3月中旬頃にかけて広川にシロウオが産卵に還ってくるが、内湾の埋め立てや護岸工事、水質汚染などの影響を受けて、1990年代頃にはその数が激減し、漁も行われなかった時期があった。その中で2001年頃に住民有志で継承活動が開始された。同じ頃、産卵環境等の調査が町で行われ、また環境保全の観点から河川の清掃活動が住民、行政、市民ボランティア等によって取り組まれるようになった。

2001年7月5日発行の「広報ゆあさ」には「ゆあさの風物詩 広川のシロウオ復活に向けて」と題する2頁の記事が掲載されており、「シロウオの復活」という理念が提示されていたことが分かる。

塚田昌秀さんは、島之内商店街で理髪店を営む傍ら、シロウオ漁を継承する漁師の一人で、島之内商店街振興会会長として地域づくりに尽力してきた人でもある。「漁は腕の力だけじゃだめで、体全体を使って網を引き揚げる。櫓や網などの漁具は古い道具を修理して使う。将来に伝えていきたいが、若い子が少なくなって、後継者がいない。伝統的な漁法や食文化をまちおこしに活かし、子どもたちにシロウオを食べさせたい」とのことだった。約20年前にシロウオというと、「まだやっているの?」と驚かれた。まちづくりの中で古いものを立ち上げたら面白いと思い、商店街でシロウオまつりを立ち上げた。現在は商工会や行政、各種地域団体を含む実行委員会が組織され実施されている(2018~19年に筆者聞き書き)。

ところで、シロウオ漁は、「マイナー・サブシステム」あるいは「遊び仕事」として捉えることができる。つまり、それは、中心的な生業ではないにもかかわらず、それに携わる人の生きがいや、人間と自然とのつながりに関わって極めて重要な活動といえる。

共育の視点からも、漁が有する一網打尽にしない精神性や文化的な豊かさを再評価し、現代的に活用すべきである。実際、漁の技術や郷土料理の伝承、川の清掃、イベントの企画運営が地域の人々によって行われているが、一連の活動を通じて、互いに学習し、地域に対して誇りを持ち、自信をもって生きる姿勢が育まれているのではないか。こうした営みを持続していくことが今後の課題である。そのために、例えばシロウオ漁が行われている地域間の交流を進め、ネットワークを形成し、継承できる力量を地域全体で形成していくことも必要となろう。

おわりに

湯浅町では醤油発祥のまちとして地域ブランディングが進められているが、その一つの地域イメージに収斂されない多様な景観や歴史が継承されている。しかし社会変化の中で、もはや地域だけでは、それらの継承が困難な状況も見られる。こうした中、地域の民俗文化の継承過程に見られる学びの意義を検討することが重要である。

今後、観光事業が文化継承の仕組みづくりの議論に接合されるならば、地域課題解決を志向する観光教育が開発されるとともに、マストツーリズムを前提とした基幹産業としての観光とは異なる、人口減少時代の身の丈に合った地域に根ざした観光が創造されることになるだろう。

引用・参考文献

- 中島智・井口貢(2011)「観光文化に注ぐ地元学のまなざし」井口貢編『観光文化と地元学』古今書院。
- 岩佐礼子(2015)『地域力の再発見』藤原書店。
- 高野孝子編(2014)『PBE 地域に根ざした教育』海象社。
- 鶴見和子(1996)『内発的発展論の展開』筑摩書房。
- 鶴見和子(1999)『鶴見和子曼茶羅IX 環の巻』藤原書店。
- Melanie Smith 他(2014)『観光研究のキーコンセプト』小槻文洋他訳、現代図書。
- 金武創(2017)「ニューツーリズム」谷口知司他編『これからの観光を考える』晃洋書房。
- 石森秀三(2001)「内発的観光開発と自律的観光」石森秀三他編『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』(国立民俗学博物館調査報告21)。
- 荒川康(2012)「地域政策:住民とどう向き合うのか?」山泰幸他編『現代文化のフィールドワーク入門』ミネルヴァ書房、pp.41-58。
- 橋本和也編(2019)『人をつなげる観光戦略』ナカニシヤ出版。